

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 5 月 20 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	峠 明杜

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
瀬戸臨海実験所、京都大学白浜水族館、京都大学原子炉実験所、京都市動物園、京都大学生態学研究センター、京都大学霊長類研究所、公益財団法人日本モンキーセンター
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
インターラボ
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 4 月 4 日 ~ 平成 26 年 4 月 9 日 (6 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学理学研究科生物科学専攻
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真 (必ず 1 枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの) の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
京都大学は学外にも多彩な研究機関を持っている。しかし京都大学に属しているだけでは、京都以外の地でのどのような研究が行われているかに触れる機会は滅多にない。本実習ではそのような遠隔地に実際に赴き、京都大学の様々な研究機関について知ることができた。 本実習は下記の日程で行われた。以下では本実習で訪れた各施設で体験したこと・学んだことについて報告する。
【日程】 4/4 オリエンテーション、懇親会 (京都泊) 4/5 瀬戸臨海実験所、京都大学白浜水族館 (白浜泊) 4/6 京都大学原子炉実験所 (京都泊) (4/7 入学式) (京都泊) 4/8 京都市動物園、京都大学生態学研究センター (京都泊) 4/9 京都大学霊長類研究所、公益財団法人日本モンキーセンター
◎瀬戸臨海実験所、京都大学白浜水族館 (和歌山県白浜町) こちらでは、まず 7 名の教員の講義を受けた。ヤドカリ・クラゲ・ウミグモ・フジツボ・カサガイ・カエル・シャコなど多彩な研究対象についてお話を聴くことができた。講義の中で、動物界は 40 門(所説あり)に分かれているが、そのほとんどの動物門をこの瀬戸臨海実験所で研究されている/されたことがあるという話には驚いた。自分は陸上の生物にしか興味がなかったが、海生無脊椎動物の多様性やその研究意義に触れることができ、とても良い経験になった。 講義後には、実験所の施設や京都大学白浜水族館の見学をした。上記の各分類群ごとに水槽が並べられていたり、海中・砂浜・干潟など様々な環境を再現した水槽が並べられていたり、その展示方法がすごく良いと感じた。また水族館のバックヤードを初めて見学することができ、展示方法の工夫をより詳細に学ぶことができた。
◎京都大学原子炉実験所 (大阪府泉南郡熊取町) これまで物理学を学んでこなかった自分にとって、最初はあまり興味を持ってない施設であった。しかし、「放射線生命科学」という研究分野について詳しく話を聴けたこと、また研究用原子炉などの滅多に見学することのできない施設を見学できたことなど、非常に貴重な経験になった。
◎京都市動物園 (京都府京都市) 京都大学吉田南キャンパスのすぐ近くにあり、学部生のころにはたびたび通った動物園であったが、今回はキュレーターの方による解説を聞きながら見学することができ、新しい発見も多かった。また動物園での研究の可能性や意義などに触れることができ、野生動物を対象にこれから研究を始めようとしている自分にとっても視野の広がる部分もあった。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

◎京大大学生態学研究センター（滋賀県大津市）

学部生の頃は生態学に強く関心をもち、生態学研究センターの教員による講義・実習をたくさん受けたが、生態研を訪れるのは初めてであった。3人の若手研究者の研究紹介を聴いた後、センター内の施設を見学した。水系・陸系両方の生態系についての野外調査や実験だけでなく、理論研究も精力的に進められており、共同利用研究拠点としての生態研の重要性を学ぶことができた。

◎京都大学霊長類研究所、公益財団法人日本モンキーセンター（愛知県犬山市）

霊長類研究所では所内を見学したあと、湯本貴和所長のお話を聴いた。霊長類研究所の学生であり学部生の頃から何度も来た事がある自分にとってはあまり新しいことは無かったが、京都からはるばるやってきた同期の人たちがすごく興味深そうにしていたのが印象的であった。

日本モンキーセンターでは、その歴史や研究価値などについて講義を受けたあと、施設内を自由に見学した。日本にはニホンザル1種しか生息していないが、こちらでは60種もの霊長類を見ることができる。百聞は一見に如かずの言葉通り、その多様性を深く感じる事ができた。

【総括】

本実習を通して、様々な研究対象や研究手法などの可能性について触れることができた。また、これほど多様な研究施設を有している京都大学に属することができ、自分が非常に恵まれた研究環境にいることを実感した。これから自分の研究を進めていくうえで今回訪れた施設にお世話になることがあるかもしれない、可能性を広げることができたと思う。

本実習では京都大学理学研究科生物学専攻の多くの同級生たちと交流する機会を得られ、中でも特に、これから2年間ないしは5年間を共にする霊長類研究所の同期たちと仲を深めることができたことはかけがえのない財産になった。それぞれ専攻する分野は違えども、互いに切磋琢磨しあえる関係を築いていきたいと思う。



左：研究用原子炉（原子炉実験所）、右：ラオスから来たゾウ（京都市動物園）

6. その他（特記事項など）

本実習は PWS リーディング大学院プログラムの援助を受けて行いました。本実習のためにいろいろな手配をしてくださった皆様に深く感謝申し上げます。